ウルリム
響
울림

聖公会生野センター機関誌

第24号
2002年8月10日発行

題字：康秀峰

E-mail:ikuno.po@nskk.org　URL http://www.nskk.org/province/ikuno

聖公会生野センター10周年にあたり

古本 純一郎

5月下旬に開催された日本聖公会第53（定期）総会に於て、「『聖公会生野センター10周年記念募金』に日本聖公会が参加する件」と、「聖公会生野センター運営に日本聖公会が参加する体制を継続する件」の二つの議案が共に全会一致で可決されたことは、議長として関った者として大きな喜びでありました。更に続いての首座主教選挙で、大阪ご出身でセンターの設立以前から深く関っておられた宇野徹主教が選出されたことは、10周年を迎えるセンターにとって、まさに神様からの素晴らしい贈り物であったと思います。

第39（定期）総会に於て「聖ガブリエル教会、聖ガブリエル地域活動センター建設募金活動を積極的に支援し、完成後は、その趣旨にそつて日本聖公会が運営に参加していくこと」が決議されて、1992年に開設された「聖公会生野センター」が、はや10年を迎えることになりました。10年の歩みは決して平坦なものではなかったと思いますが、呉光現主事と歴代の聖ガブリエル教会の牧師を中心に、運営委員・職員の皆様の献身的な情熱と働き、後援会員をはじめ、全国にわたる多くの方々の祈りと献金に支えられて今日を迎えることができたことは私たちの喜びであり感謝であります。皆様と共に神様に心からの賛美と感謝を捧げたいと存じます。

機関誌「ウルリム（響）」を通して、センターの働きが単に生野地域の在日韓国・朝鮮人の福祉事業だけに留まらず、日本と韓国・朝鮮の「和解」と「共生」のために文化の交流、啓発活動に広く手を伸ばされていることを知り、その奉仕とご努力に唯々敬意と感謝を表わすばかりです。

私の属する神戸教区も、阪神・淡路大震災の折にはセンターと関係者の皆様に大変お世話になりました。早々に駆けつけて援助の手を差し伸べていただき、長田地区を中心に物心両面から長期にわたって救援活動をいただいたことは忘れることが出来ません。心から感謝申し上げます。

私事ですが、聖ガブリエル教会の生みの親と言っていいのでしょうか、張牧師（当時は日本名で私にとっては張本牧師でした）と私の父とは福岡神学校時代からの友であった関係で、私も子どもなりに戦前の先生をおぼろげに存じておりました。先生とご家族の戦前・戦中のご苦労を父から聞いておりましたが、現在の「聖公会生野センター」の働きを主の御許からご覧になってどんなにか喜んでおられることでしょう。

設立10周年を迎え、「聖公会生野センター」が、日本聖公会によって設立され、その運営に当たる<私たちのセンターである>ことを今一度再確認し、その働きと、特に記念行事のために祈りと支援の輪を皆さんと共に広げてまいりたいと願っています。（ふるもと・じゅんいちろう　日本聖公会神戸教区主教）

もくじ

1　聖公会生野センター10周年にあたり …… 古本 純一郎
2　時のしるし　「共に生きること」と「旅すること」 …… 西原 廉太
3　ワールドカップをめぐって／市民社会と政治のねじれ …… 金　光　敏
4　W杯へのささやかなケチ …… 河　棕　文
5　こんな本あります　本から「在日コリアン」を考える⑩ …… 高　二　三
6　同世代 …… 丁　　章
7　祝いましょう＝センター10周年＝ …… 呉　光　現
8　お知らせ／余韻

「共に生きること」と「旅すること」

西原廉太

現在、立教大学で「多文化・多民族共生社会を考える」という科目名の授業を担当している。これは全学共通カリキュラム総合Bという科目群の一つで、複数の教員が常時出席し、またゲスト講師を多数招くことができる、という特徴を持っている。担当者は私の他、大学チャプレンの香山洋人さん、神奈川県国際交流協会職員で在日大韓基督教会信徒の金迅野（キム・シニャ）さんの三人で、今年で三回目である。年を追うごとに受講学生の数も増え、今年は350人入る教室が毎回立ち見が出るほどであった。まずは、担当者それぞれが自分史、自分の物語を語り、社会学的アプローチ、歴史学的アプローチからの講義を重ね、大教室の中で可能なワークショップなども行う。ゲスト講師は毎年多彩である。在日コリアンの方々はもちろん、沖縄、アイヌの方、セクシャル・マイノリティー、イスラムの方、市民運動を担う日本人の方々に来ていただき、それぞれの課題や個人史を語っていただく。

ここでその詳しい内容をご紹介する余裕はないのだが、いつも準備する側の想定を遥かに超えるダイナミズムがこの場から生みだされる。最近の若者の特徴として、無知、無関心、無感動という三要素が言われる。しかし、この教室の中で、学生たちは実際に涙を流し、驚く。多くのことを知り、関心を持ち、そして感動するのである。教室の誰一人として、自分の立っている場所を曖昧にすることを許されない。学生たちは、他者と共に生きることを問うことが、すなわち自分自身の生き方、自分自身のアイデンティティーを問うことに他ならないことに気づく。今年のゲスト講師の一人である趙博（チョウ・パク）さんは、「在日問題」は「在日日本人問題だ」と語られた。「在日日本人」が一つの重要なキーワードとなった。また、金迅野さんは、共生社会を実現するためには、在日であれ、日本人であれ、すべての者が自分自身を見つめ直す作業、すなわち「自分の井戸を掘る」作業が不可欠であることを強調される。自分のルーツ（roots）を辿ること以上に重要なことは、自分がこれまで生きてきたルート（routes）を検証することであり、そのことによってまた他者との「違い」も貴重なものとして見えてくる。

しかしながら、「自分」というものに出会い、「他者」と真に出会い、そして繋がるということは実際にはそう簡単なことではない。「理論的にこうすれば」であるとか、「効率的に共生社会を実現するにはこのように」というマニュアルなどはもちろん存在しない。今年のゲスト講師の一人であった辻信一さんは、「共に生きるには時間がかかる」と言う。共生社会を生み出す愛とは、「遅さそのものが本質的であって、時間を省いたり、スピードアップしたり、効率化することが、そのものの中身を損なわずにはおかないといった、非妥協的なプロセス」なのである。人と人が繋がり合うというのは確かに時間のかかることである。私たちもともすれば、あせりながら、前のめりになりながら、「共生社会の実現」という目標を目指して、自らを忙しくさせてはいないだろうか。そこにはマニュアル的なものを求める誘惑も必然的に内包される。「今はそれどころではない」と言う中で大切なものが捨て置かれていく。

そういう意味で、他者と出会い、自分と出会うための「旅」の重要性を、私たちはもう一度思い起こしたい。アブラハムの旅も、行き先も分からずにひたすら、さまよう天幕の旅であった。確かに、旅ほど非効率的で時間がかかるものはない。しかし、そのような一見、無駄だらけに見えるような旅という時の中で、アブラハムは他者との、また神との豊かな出会いを経験した。そして「自分の井戸」をも発見することになるのである。聖公会生野センターでは丸木位里、俊さんの作品展を企画されるそうであるが、丸木さんご夫妻などは本物の旅人であった。広島だけではなく沖縄の人々とも出会い、途方もない時間をかけて巨大な絵を完成された。

この９月には今回の授業の学生有志約15人で、生野を訪れる「旅」をする。しかも、参加する学生の７割が在日の多様なマイノリティーである。どのような旅となるのか、どのような出会いがあるのかは分からない。しかし、予想もつかない発見がお互いに与えられるはず。現場への旅、歴史への旅、そして自分自身への旅。こうした時間のかかる「旅」こそが、共に生きるための知を備えてくれるのだと思うのである。

（にしはら・れんた　中部教区司祭、立教大学教員）

ワールドカップをめぐって／市民社会と政治のねじれ

金光敏

ワールドカップが終わり、その余韻もようやく落ち着こうとしている。ワールドカップについては、正直複雑な心境だったが、いざ終わってみると、それはそれでよかったかなと思っている。韓国と日本が、国際的なイベントに共同で取り組み、それがきっかけとなって市民交流が深まることは、決して悪いことではないし、何よりサッカーという競技に私自身が大いに楽しんだ。ただ韓国、いや朝鮮半島と日本との間の歴史問題や人権問題は、イベントを通じて仲良くなることとは別問題である。と少し冷ややかに考えてきたのが私のワールドカップ観である。

それは多分、私だけでないだろう。この間に、「有事法制」や日本政府首脳による「核兵器」云々発言、石原慎太郎待望論が公然と語られ、ワールドカップに興じている最中にも、南北間で銃撃戦が起こった。まさに政治は、市民の感覚とはちがう次元でうごめいていることを凝視せずにはおれない。そんなたやすい時代ではないのだ。

しかし、ワールドカップをめぐって垣間見ることができたよいことにも注目したい。まず何よりも、私は、大分県の中津江村を挙げたい。なぜかといえば、中津江村の人々は、間違いなくアフリカ・カメルーンに親近感を抱いたはずである。文化・風習がちがい、肌の色もまったくちがうカメルーンの人々を迎え入れるため、村を上げてその準備にとりかかられた。メディアを通じてではあるが、中津江村にカメルーンの選手たちが訪問する前と訪問した後と、村人の「カメルーン」を眺める視線がちがうように感じられた。「ちがい」に敏感で、異民族・異文化との交流が苦手な日本社会で、やはり「出会う」ことの大切さを象徴するケースであった。中津江村の人々は、外国からやってくる言葉や肌の色のちがう訪問者に、今回のことが経験となって今後も違和感なく迎え入れることができるのではないか。「出会う」ことの素晴らしさである。

他にもワールドカップをめぐってよいことがあった。日本には本当に多様な民族が暮らしていることがわかった。トルコ戦がある日は、在日トルコ人の応援風景が、ブラジル戦がある日は、在日ブラジル人の応援風景が、韓国戦がある日は、私たち在日同胞の応援風景がメディアを通じて日本全国に流れた。在日外国人に決して親切でない日本社会においても、私たち在日外国人が、どっかと腰を下ろしこの社会で生きている姿が、日本人ひとりひとりに届いたならば、それも悪くない。日本はすでに多民族・多文化社会なのである。

だから、「有事法制」や政府首脳の「核兵器」云々発言、極右思想を恥ずかしげもなく語る石原東京都知事の存在が、在日外国人にとって“脅威”以外の何ものでもない。市民社会と政治の“歪み”、“ねじれ”を正していくことは、いま日本社会に一番急務の課題だろう。

このワールドカップを通じて韓国代表選手の大活躍に拍手を送り、各地のキャンプで外国人選手団を暖かく迎え入れた日本人市民と、閉塞感漂う社会状況下で、次期政治指導者に石原都知事をと考える市民たちが、重なっているのか、重なっていないのか、私などは、サッカーボールの行方に一喜一憂しながら、そのことが気になった６月、ワールドカップの頃であった。

（きむ・くぁんみん　民族教育促進協議会事務局長代行）

緑に囲まれたこどもたちの庭
学校法人親愛学園
親愛幼稚園
園長　古賀久幸
近鉄奈良駅より徒歩２分
〒630-8213 奈良市登大路町44
TEL (0742)23-3210 FAX (0742)23-6786
http://www.nskk.org/kyoto/nara/shinai/
―本当に重要なことを見分けられるように― フィリピ1:10
2003年度　入園説明会　8月30日
願書受付　8月30・31日・9月2日

W杯へのささやかなケチ

河 棕 文

世界中を騒がせたワールドカップがやっと終わった。延べ何百万の人類がテレビに首ったけになったという。私も例外ではない。初の共催、初のアジアでの開催、21世紀の初の開催など、「三つの初」と、もてはやされた今回のW杯である。マスコミで書き立てているように、これからの日韓関係はうまくいくのだろうか。幾つかの感想を述べてみたい。

まず、用語の問題。日本では「サッカー」が一般的ないい方である。韓国も「蹴球（チュック）」と読んでいるが、英語式なら、なぜか「フットボール」より「サッカー」が優勢である。しかし、ＦＩＦＡのあの「ちゃっかりさ」に敬意を表すなら、「フットボール」を使うべきである。聞くところによると、「フットボール」より「サッカー」を強力に押しつけているのは、アメリカさんである。「国技」のアメリカン・フットボールと紛らわしいためという。アフガンや中東での振る舞いを思い起こし、私は今から「サッカー」の文字を自分の辞書から外す。

日本の初戦の相手はベルギー。私も会合をキャンセルしてテレビの前に座った。試合も見たかったが、あのヒデが君が代を歌うのかを、自分の目で確かめたかったためである。試合前の儀式で選手全員の顔が一人ずつ映されるが、ヒデの唇は軽く動いていた。案外、黙っている選手も結構あった。ちゃんとした「国歌」になったから、もう君が代の強制も「解禁」かな。

「日本のワールドカップとナショナリズム」について報告をまとめながら、1998年の事件の深刻さに気がついた。まるで「踏み絵」のように君が代斉唱を強いるあの「日本」の暴力。と同時に、「生まれて初めて清々しく君が代を歌う」日本の若いサポーターの姿も印象的であった。サッカー、否、フットボールも「安全地帯」ではないな。

５月31日の開幕式。玄海灘を越えて日本から珍客が見えた。戦後初めて皇族の高円宮が韓国の土を踏んだ。日韓友好を祝する天皇家の代表として。当初は天皇の訪韓がささかれたが、相次ぐ教科書問題の発生で取りやめになった。

韓国のマスコミはこぞって事実のみを簡単に伝えた。画面で見るあの人は、まぎれもなく、植民地支配と侵略戦争を企てた「日帝」の代表の息子である。天皇賛美で彩られている教科書が起こしたトラブルは現在進行形である。「歴史」を素通りした天皇家の初訪韓は大成功した。

W杯の盛大な祭りに目を奪われながらも、憂いも高まる。スポーツ帝国主義は最早古めかしい話と置いておこう。日の丸と君が代、さらに海軍旗まで入り乱れるフットボール競技場。若い日韓のサポーター同士の「純粋」な激突。彼らに日韓の未来を任せてみようという誘いが聞こえる。後ろめたい過去を切り捨てて覆い隠して、「日韓新時代」はもっとスピードを上げる。

（は・ぢょんむん　ハンシン大学国際学部）

平安女学院　中学校・高等学校

大阪会場 入試説明会
高槻市民文化会館 10月25日(金)16:30～19:30 随時
個別相談会

〒602-8013 京都市上京区下立売通烏丸西入ル
TEL075-414-8101(入試広報室)

本から「在日コリアン」を考える ⑩

高 二 三

μ（ミュー）の奇蹟

尹敏哲・著
定価2800円＋税
新幹社

1973年に私は中央大学に入学した。在学中の1975年、大学の先輩にあたる李哲（イ・チョル）さんが高麗大学大学院に留学中、「国家保安法」違反で逮捕され、死刑判決を受けた。李哲さんと同年代で私と親しくしている先輩に李哲さんを知っているかと尋ねた。知っているようだが、あまり詳しくは教えてはくれなかった。救援活動をやりたい旨を伝えたが、関わらないほうがいいとも言われた。結果、学内では李哲さんの救援活動は活発に行なわれなかった。そして、なぜ関わらないほうがよいと先輩が言ったのか謎のままとなった。そして私の心の隅に、李哲さんの救援運動にかかわれなかったという気持ちだけが残った。

1988年、李哲さんは、13年の「服役」ののち釈放された。そして日本に帰ってきた李哲さんは在日韓国良心囚同友会を結成し、いまでも中心メンバーとして活動している。こんな李哲さんに初めて会うことが出来たのは、1998年、李哲さんの翻訳で文益煥（ムン・イクファン）先生の『くすりの手―韓国民衆健康療法』という本を作ったからだ。

李哲さんは「誠実」という言葉をそのまま生きている人であった。本を作る作業を初めから終わりまでやると、その人柄がよく見えてくる。世俗の醜さにまみれて暮らしている私は、李哲さんと出会うことで清風を体に感じるのだ。

さて、その敬愛する李哲さんから電話があった。「和歌山に尹敏哲（ユン・ミンチョル）という詩人がおるんやけど・・・」と、まだ板についていない大阪弁で語りかけてくる。良心囚同友会の仲間らしい。さっそく尹敏哲さんの詩を送ってもらった。とてもよい詩だった。問題は詩集が日本では売れないということだった。李哲さんにも尹敏哲さんにも、もちろん新幹社にもお金がない。だが、李哲さんが良心囚同友会のメンバーに購読をはたらきかけて、一定の売上をクリアするということになった。そして、やっと出版のはこびとなった。

数名の良心囚同友会のメンバーも集まり、「出版を祝う会」が大阪で行なわれた。金時鐘（キム・シジョン）先生が尹敏哲さんの詩のことについて語って下さった。丹念に尹さんの詩を読んで下さって、歌う詩と刻む詩が混在していて２冊に分冊してもよかったのではと述べられた。詩は安易に歌ってはならず、尹敏哲さんの詩には刻む詩に秀逸なものがあると述べ、金先生のお気に入りの「モタラのなみだ」という詩を朗読された。ジーンとくる詩であった。

金時鐘先生のご指摘には一部厳しい評価もあった。しかし尹敏哲という後輩詩人のために呈する批評であったのだから、これははなむけの批評であったと言えるのかもしれない。

初めて会う尹敏哲さんは終始ニコニコして温厚な方のようだった。自分のために多くの仲間が集まってくれ、照れくささとともに誇らしさも加わり、すこしばかり緊張している面持ちであった。きびしく、つらい道のりだったにちがいない尹敏哲さんの、詩人としてのスタートはこうしてきられた。だが三次会で「涙をふいて」という歌を歌っている時、彼の孤独を感じた。しかし尹さんは李哲さんをはじめ多くの仲間と共に生きている。そして「絶望」を味わった人だからこそ、真の強いやさしさを身につけていると思った。私はこのような現場に立ち会えたことをとても幸福なことだと思っている。（こ・いーさむ　新幹社代表）

『μ（ミュー）の奇蹟』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno.po@nskk.org

祝いましょう＝センター10周年＝

呉 光 現

1992年４月に本格活動を始めた聖公会生野センターが今年10周年を迎えました。今、これまでの活動を基に10周年の「お祝いの年」を迎えています。ただ「お祝い」は聖公会生野センターの活動の延長にあり、そしてこれからの活動に活かされるものでなければなりませんが、「お祝い」は楽しくしたいものであります。

センターは日本聖公会が主体となり、生野での地域活動の拠点として働きを始めました。そして当初から、日本人と在日韓国・朝鮮人との協働のもと、マイノリティ故に人権が守られていない人、福祉の谷間におかれている人など、「地域の中で周辺におかれている人」を大切にしたいと願ってきました。10年間で様々な取り組みをおこないましたが、簡単に紹介すると「①建物の中で②地域の中で③地域を越えて」になるでしょうか？

① 建物の中で・・

現在韓国語教室、絵画教室を日常プログラムとして実施し、年に６回「こみち寄席」をおこなっています。夕方以降しか空間がないと言う状況ですが、韓国語教室は、入門からほとんど韓国語だけで行う研究クラスまで５クラス、絵画教室は障害児・者が多く集う教室になっており、教室のグループ展、受講生の個展等を展開しています。そしてこみち寄席はご近所の方の気軽な憩いの場になっています。

② 地域の中で・・

生野地域は多くの取り組みがありますが、センターとしてはここ数年は精神障害者の地域生活支援の事業に力を入れてきました。これは障害者福祉の中でも一番社会的資源が弱かった精神障害者の分野に出会ったことがそのきっかけでもありました。現在はＮＰＯ法人で活動がされていますが、継続してセンターも関わっています。

もう一つ大切なことは、地域の中でのネットワークです。センターだけでできることは非常に限りがあります。しかし同じ志を持つ人が集まり、取り組むことが力になります。数年前のことですが、多くの人が手をつなぎ、独居の在日老人の生活をサポートしたのは、その例だったと思います。センターは生野地域の人たちとの協働により、多くの働きがなされてきたのではないでしょうか。

③ 地域を越えて・・

個別の課題に取り組むとき、地域の中だけで完結するのは非常に難しいものです。むしろ積極的に地域の外の人との協働が必要になってきます。その点ではセンターの10年は、地域内外の人との協働の10年であったでしょう。積極的に「外」に出ることが新しい取り組みの出発になったことも多々ありましたが、その中でも一番印象的なことは、阪神淡路大震災を契機に始めた「弱者救援センター」と、その発展した形の「聖公会長田センター」でした。まさに多くの人とのつながりが震災救援活動から、日常の地域活動へと発展させていく力になったものでした。残念ながら聖公会長田センターの活動は諸般の事情により、継続して専従の主事を置いての活動は続けることができませんでした。そういう点では一つの課題を私たちに与えた活動でもありましたが、多くの人の関わりにより神戸での活動がなされていったことは、今後の担保になると信じています。

この度の10周年の「お祝い」は聖公会生野センターの10年にふさわしいものをと願っています。中国朝鮮族自治州訪問の旅（８月31日～９月４日）、10周年記念礼拝（９月22日）、ソウルでの丸木美術展（10月７日～12日）そして多数者よりも少数者、力のある者よりも無い者を大切にしたイベント・トークショー（2003年３月16日）まで、忙しくとも楽しい10周年にしていきたいものです。そして記念募金（目標500万円）を含めて多くの人の参加を期待しています。

あなたも10周年の「お祝い」に関わってみませんか？

（お・くあんひょん　聖公会生野センター総主事）

同世代

丁 章

あしたからだって
日本人になれるはずだ
わたしたちの世代の在日は

それほどまでに仕込まれた日本人らしさ

爪でも切るかのように
朝鮮とのつながりを断とうとする

同胞たちよ
またのびてくる意識を疎み
また切るが
またのびてくる
よくよく深爪には気をつけることだ
その痛みをわたしも知っている

埋没したまま腐敗してゆく根
この列島の土壌では芽吹かぬと
誰もがうなだれている
ふりそそぐ日本語の雨が根を腐らせるのではなく
言語の雨は汚染された土壌に吸われて毒液と変わるのだ

切りすぎでも伸ばしすぎでもなく
健全に手入れされた爪先で
わたしたちの世代の在日が
根を掘り起こさねば
これで朽ち果てるにちがいない
在日の未来

詩集『マウムソリ　―心の声―』より

丁　章　（ちょん・ぢゃん）
1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住

著書
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ　－心の声－』（新幹社）

お知らせ

聖公会生野センター10周年記念事業

★中国朝鮮族自治州成立50周年祭典参加ツアー
2002年8月31日（土）～9月4日（水）

★10周年記念礼拝
2002年9月22日（日）午後2時　聖ガブリエル教会

★21世紀人権展（丸木美術展）
2002年10月7日（月）～12日（土）世宗文化会館（韓国ソウル）

★10周年記念イベントトークショー
2003年3月16日（日）　大阪女学院ヘールチャペル

◎10周年記念募金　2003年3月31日まで　目標金額500万円
多くの方々のご参加お待ちしております

お詫びと訂正

ウルリム23号「ご支援くださった方々のお名前」に掲載もれがありました。お詫びし訂正いたします。

後援会費（50音順・敬称略）

内宮隆夫　梅本百合子　江野隆夫　国津恵美子　国津進　小林満寿子　小堀孝子　相楽弘子　桜井揚子　佐藤悦子　杉本美津子　多方清子　田辺美恵子　辻節子　西元マサエ　丹羽美恵子　早川善樹　樋口敏雄　日高和夫　日高八重子　福田順子　福田光宏　藤木典子　堀貴美子　堀武　前原潔　俣野恵子　南康子　三村タミエ　茂木充　森中央　湯浅七枝

聖公会生野センター2001年度会計報告

（2001年4月1日～2002年3月31日）

収入	予算	決算
分担金	2,140,000	2,120,000
後援会	4,000,000	3,027,038
寄付献金	1,500,000	4,064,766
クリスマス	700,000	761,500
3.1信施	2,500,000	3,000,000
プログラム	2,444,000	3,454,835
その他	280,000	141,140
資金取崩	1,730,500	0
合計	15,294,500	16,569,279

支出	予算	決算
活動費	1,000,000	741,733
プログラム	2,358,500	3,137,106
人件費	8,050,000	7,447,830
事務諸経費	3,886,000	3,596,148
資金繰入	0	1,646,462
合計	15,294,500	16,569,279

いつもご支援ありがとうございます。2001年度は大口のご寄付があり、なんとか資金を取り崩さずにすみました。今後ともご支援よろしくお願いいたします。

余韻

◆とても暑い日が続いています。なんだか溶けてしまいそうです。自分にとって不安なことは、声に出しやすいものです。そんなときでも、隣の人が不安に思っていることを、想像して声に出していくのは、むずかしいことなのでしょうか。政府が個人の情報を管理する社会。それは誰にとっても暮らしやすい社会ではないでしょう。一人一人にとって暮らしやすい社会とするためには、権利を奪われている人の声を聴き伝えること。このことを忘れてはいけません。（す）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円（個人）　1口 10,000円（団体）
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail:ikuno.po@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。